和歌

後拾遺和歌集　―　現代語訳　―

男に忘れられていました頃、貴船神社に参詣して、御手洗川に蛍が飛んでいましたのを見て詠んだ（歌）

思い悩んでいると、沢の蛍も我が身から抜け出した魂ではないかと（思って）見ることです。

新古今和歌集　―　現代語訳　―

近臣たちが漢詩を作って和歌に合わせましたときに、「水郷春望」という題を（詠んだ歌）

はるかに見渡すと、山の麓に霞がかかって、（そこに）水無瀬川が流れている。夕暮れ（のすばらしい季節）は秋だと、どうして思い込んでいたのだろう（この春の夕暮れも、すばらしいではないか）。

千五百番歌合のときに（詠んだ）、春の歌

薄いのも濃いのもある野辺の緑の若草によって、その跡までもが分かることだ。雪が（あるいは早く、あるいは遅く）解け消えていった、一様ではなかったその様子が。

作歌事情は不明

誰がまた花橘の香りから（今の私がしているのと同じように、私のことを）思い出すだろうか。私も世を去って昔の人となってしまったならば。

西行法師が勧進して、百首歌を詠ませましたときに（詠んだ歌）

見渡してみると、花も紅葉も（美しいものは）何もないのだなあ。（それがまた趣深いよ。）この浦の苫屋から見る秋の夕暮れの光景は。

摂政太政大臣家の歌合のときに、「湖上冬月」（という題で詠んだ歌）

志賀の浦の、（水際から凍ってしだいに）遠ざかってゆく波の間から、凍りつい（たような冴えた光を放っ）て上ってくる有明の月よ。

百首歌の中に、「忍恋」（秘めた恋）という題を（詠んだ歌）

我が命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえ。（もし、このまま）生きながらえていると、（恋心を）秘めておこうとする力が弱まってしまうといけないから。

東国の方へ修行で参りましたときに、富士の山を詠んだ（歌）

風に吹かれてなびく富士山の煙が空の彼方に消えてゆくように、行方も分からない私の思いであることよ。